

巻頭言

『APU言語研究論叢』第4巻に掲載された論文は、これまでにAPUの言語教育にかかわった教員たちの研究分野の豊かな多様性を示しています。本巻所収の各論文は、著者の言語研究と言語教育への情熱を反映するものです。私たちが『APU言語研究論叢』を通して研究成果を発信する主な目的は、各自の教育実践や教授法、指導する言語に関する認識を再確認し、さらなる研究を進めることを私たち自身に促すことにあります。本誌をお読みいただいた皆さまに、ここに掲載された論文がこの目的に沿うものであると感じていただければ幸いです。

岩本穰志氏は、学生にモチベーションを与えるゲーミフィケーションの影響について報告し、ゲームの要素を言語学習プロセスに組み入れるためのアプローチと、学生の学習経験においてそこから得られる多くの利点を読者と共有しています。

羅華氏と張恵芳氏は、どちらも中国語の特定の文法に焦点を当て日本語と対照分析しています。そして、そうした注意深い分析が文法を効率的に教える上でいかに実践的な結果に結びつくかを論証しています。

小島直子氏は、教養及び専門科目（EMI）に従事する教員と言語教員による共同研究プロジェクトの知見を報告し、EMIにおいて学生の動機づけを高め、より良い成果をもたらすための具体的な指導方法を提案しています。

James Blackwell氏は、ボトムアップ実証研究の大規模なプロジェクトを通じたスピーキング・テスト開発のためのテキストベース手法について論述しています。こうした系統的な分析が、スピーキング力の評価に必要な特定の言語スキルを明らかにするうえで、その指導に必要な方法を提案することに結びつき、アセスメントの設計において勘に頼ることを避けるために不可欠である論拠を示しています。

Anthony Diaz氏は、学生が書いた作文コーパスの開発に関する予備研究を提案しています。このような大規模なプロジェクトに取り組むことにより、学生のライティングの問題点を明らかにし、実証に基づいた明確な判断のもと、レベルの異なる学生に合ったライティングの指導が可能となります。

衛藤智子氏は、大学の英語開講必修科目において、英語でのディスカッションへの関与にかかわる学生のニーズに焦点を当て論述しています。さらに、言語教員とEMI教員がともに興味を示すであろう言語行為の例を提供しています。

Kent Jones氏は、大学の英語コースにおける学生の英語使用への期待を満足させる可能性に興味を示し、教室内での目標言語と母語使用のバランスを保つためには、教員と学生の交渉が重要であることを指摘しています。

最後に、Andrew McMahon氏は、大学で採用されている英語の教科書の中でどれほど多様な英語が使用されているかを分析しています。同氏の論文は、教育者が教科書の評価を行い、出版社にフィードバックすることの重要性を読者に訴えており、この主張はより質の高い教科書が世界中の教室で用いられることにつながり得るもので、すべての教科書発行者にとって興味深いものとなっています。

本書におさめられた論稿がみなさまの知的刺激と教育の実践的なアイデアの源となり、新たな研究へと発展することを願っています。